

11/23 Thu.
holiday

第130回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 130 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

ヴェルディ
VERDI

クライスラー
KREISLER

ワックスマン
WAXMAN

[休憩]
[Intermission]

ベルリオーズ
BERLIOZ

小林資典 -p.5
MOTONORI KOBAYASHI

HIMARI -p.7
HIMARI

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇《運命の力》序曲 [約8分] -p.9
“La Forza del Destino” Overture

ジプシーの女 [約4分] -p.10
La Gitana

カルメン幻想曲 [約10分] -p.11
Carmen Fantasie

幻想交響曲 作品14 [約49分] -p.12
Symphonie fantastique, op. 14
I. 夢と情熱
II. 舞踏会
III. 野の情景
IV. 断頭台への行進
V. ワルブルギスの夜の夢

11/30 Thu.

第667回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 667 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor Laureate
コンサートマスター
Concertmaster

武満 徹
TAKEMITSU

モーツァルト
MOZART

武満 徹
TAKEMITSU

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

[休憩]
[Intermission]

シCHEDリン
SHCHEDRIN

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.6
SYLVAIN CAMBRELING

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

〈シグナルズ・フロム・ヘヴン〉から
I. デイ・シグナル [約3分] -p.13
“Signals from Heaven” I. DAY SIGNAL

ディヴェルティメント 第5番 八長調 K. 187
(Anh. C17. 12) [約8分] -p.14
Divertimento No. 5 in C major, K. 187 (Anh. C17. 12)
I. Allegro moderato – II. Menuetto – III. Adagio – IV. Menuetto –
V. Allegro – VII. Allegro moderato – IX. Allegro molto –
X. Allegro non troppo

〈シグナルズ・フロム・ヘヴン〉から
II. ナイト・シグナル [約3分] -p.13
“Signals from Heaven” II. NIGHT SIGNAL

※以上の3曲は続けて演奏されます。

管楽セレナード 二短調 作品44 [約24分] -p.15
Serenade for Wind Instruments in D minor, op. 44
I. Moderato quasi marcia
II. Menuetto
III. Andante con moto
IV. Finale: Allegro molto

カルメン組曲 (ビゼーによる) [約44分] -p.16
Carmen Suite (after G. Bizet)

I. 序奏 VIII. ボレロ (〈アルルの女〉から
II. 踊り “ファランドール”)
III. 第1間奏曲 IX. 闘牛士
IV. 衛兵の交代 X. 闘牛士とカルメン
V. カルメンの登場とハバネラ XI. アダージョ
VI. 情景 XII. 占い
VII. 第2間奏曲 XIII. 終曲

12/5 Tue.

第633回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 633 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor Laureate

ピアノ
Piano

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

ヤナーチェク
JANÁČEK

リゲティ
LIGETI
《生誕100年記念》

[休憩]
[Intermission]

ヤナーチェク
JANÁČEK

ルトスワフスキ
LUTOSŁAWSKI

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.6
SYLVAIN CAMBRELING

ピエール＝ロラン・エマール -p.7
PIERRE-LAURENT AIMARD

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

バラード〈ヴァイオリン弾きの子供〉 [約12分] -p.19
Ballad for Orchestra "The Fiddler's Child"

ピアノ協奏曲 [約24分] -p.20

Piano Concerto
I. Vivace molto ritmico e preciso
II. Lento e deserto
III. Vivace cantabile
IV. Allegro risoluto, molto ritmico
V. Presto luminoso

序曲〈嫉妬〉 [約6分] -p.22
Overture "Žalivost"

管弦楽のための協奏曲 [約28分] -p.23

Concerto for Orchestra
I. Intrada
II. Capriccio notturno e arioso
III. Passacaglia, toccata e corale

指揮

小林資典

MOTONORI KOBAYASHI, Conductor

劇場たたき上げ
小林資典が振る
鮮烈なる〈幻想〉



©読響

類いまれな感性と実力で本場ドイツの歌劇場で長く活躍する俊英が、ベルリオーズの〈幻想交響曲〉などを振り、圧倒的なフィナーレを築き上げる。

1974年千葉県生まれ。東京芸術大学および同大学院で指揮法をトラヴィス、遠藤雅古に師事。また、サントリーホール・オペラアカデミーに参加し、同ホールオペラ公演ではクーンらのアシスタントを務めたほか、二期会などの公演でも副指揮と合唱指揮を務めた。98年に平和中島財団奨学生、その後文化庁海外派遣研究員として渡独、ベルリン芸術大学でフスマンに師事した。

2000年からライン・ドイツ・オペラでコレペティトゥーアおよび音楽アシスタント、通奏低音奏者も務める。08年、ドルトムント歌劇場の専属指揮者として契約し、13年から現在まで、同歌劇場の音楽総監督代理と第1指揮者(カペルマイスター)の任にある。現在、ドイツの主要劇場において、第1指揮者以上の要職にある日本人指揮者として活躍。モーツァルト作品をはじめ、R. シュトラウス〈ばらの騎士〉〈アラベラ〉、ヴェルディ〈オテロ〉〈椿姫〉、グラス〈アクナーテン〉など多彩な演目で成功を収めている。

20年には、コンヴィチュニー演出のオーベール〈ポルティチの娘〉(新制作)を指揮して注目を浴びた。23/24シーズンは、ドルトムント歌劇場でプッチーニ〈ラ・ボエーム〉、オッフェンバック〈天国と地獄〉を振るほか、ヴッパータール響などに客演。日本では、18年に大阪響に客演して成功を収めたほか、19年にバレエ・アム・ラインの日本公演での〈白鳥の湖〉で好評を博した。読響とは21年8月の三大交響曲、三大協奏曲、22年10月愛媛公演に続き、3回目の共演。

11/23
横浜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

11/30
名曲

12/5
定期

Maestro

指揮

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者)

SYLVAIN CAMBRELING,
Conductor Laureate

色彩の魔術師 カンブルランが誘う 刺激的な世界



©読響 撮影=藤本崇

色彩豊かな音楽づくりで聴衆を魅了するカンブルランが、遊び心と刺激に満ちた独創的なプログラムを披露する。

1948年、フランス・アミアン生まれ。2010年から9年間、読響常任指揮者を務め、17年11月にはメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉でサントリー音楽賞を受賞した。19年4月から桂冠指揮者に就任。22年12月には、一柳慧の新作やヴァレーズ〈アルカナ〉などを指揮し、文化庁芸術祭大賞を受賞。

バーデンバーデン&フライブルクSWR響の首席指揮者、ベルギー王立モネ歌劇場、フランクフルト歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督などを歴任。クラシック音楽界の既存の概念にとらわれず、常に柔軟かつ斬新な発想で数多くのプロジェクトを成功へと導いた。現在はハンブルク響の首席指揮者、クラングフォルム・ウィーンの名誉首席客演指揮者、ドイツ・マイنتズのヨハネス・ゲーテンベルク大学指揮科の名誉教授を務めている。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管、ウィーン響など一流楽団に客演。オペラでは、メトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座、ザルツブルク音楽祭などに多数出演。録音も数多く、SWR響との《メシアン／管弦楽作品全集》は、一人の指揮者と同一の楽団による世界初の全集として、欧州の主要な音楽賞を総なめにした。読響と共演したベルリオーズ〈幻想交響曲〉、メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、マーラーの交響曲第9番のCDも好評を博している。



©Hitoshi Iwakiri

ヴァイオリン

HIMARI

HIMARI, Violin

世界に羽ばたく12歳の新星。2011年、東京生まれ。3歳からヴァイオリンを始め、6歳でプロの楽団と共演。21年、リピンスキ・ヴィエニャフスキ国際コンクールにて史上最年少で特賞グランプリを受賞。グリムミー国際コンクール、ポストッキーニ国際コンクール、モントリオール国際ミニ・ヴィオリニなど国内外すべてのコンクールで第1位を獲得。スピヴァコフ、ジャジュラ、小林研一郎らの指揮で、モスクワ・フィル、ロシア・ナショナル・フィル、キエフ国立フィル、N響などと共演。22年、フィラデルフィアの名門カーティス音楽院に最年少で合格し、現在はアメリカを拠点に活動中。使用楽器は1717年製ストラディヴァリウス「ハンマ」を前澤友作より、弓は「宗次コレクション」より貸与されている。読響とは2度目の共演。

従来の境界を飛び越えて世界中でクリエイティブな活動が続けている巨匠。1973年メシアン国際コンクール優勝し、19歳でアンサンブル・アンテルコンタンポランの専属ピアニストに抜擢された。カーター、リゲティ、クルタークら作曲家と密接な関係を築いている。ラトル、サロネン、ナガノらの指揮で、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響、シカゴ響などと共演。2008年から16年までオールドバラ音楽祭の芸術監督を務めた。ワーナー、グラモフォン、ペンタトーンなどと録音を行い、国際的な賞を多数受賞。今年はリゲティ作品を世界各地で演奏。ピアノ協奏曲は、ロンドンやアムステルダムに続き、今回東京でも披露する。読響とは05年の初共演以降、多数共演。



©Marco Borggreve+DG

ピアノ

ピエール＝ロラン・エマール

PIERRE-LAURENT AIMARD, Piano

11/23
横浜マチネー

Artist

12/5
定期

Artist

ヴェルディ 歌劇〈運命の力〉序曲

オペラの序曲には、序曲だけでも本編に劣らないほど大きなドラマを描く規格外の傑作がある。たとえば、ベートーヴェンなら序曲〈レオノーレ〉第3番であり、ロッシーニなら〈ウィリアム・テル〉序曲、そしてジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）では〈運命の力〉序曲がそれに該当するだろう。これらは劇場にとどまることなく、オーケストラのコンサートでしばしば演奏される人気曲となっている。

1861年、ヴェルディのもとにロシアから新作オペラの依頼が届く。イタリアの国会議員に選ばれ、前作〈仮面舞踏会〉の初演から2年を経ていたヴェルディは、ふたたびオペラへの情熱を取り戻してこれを受諾する。新作の題材にはリバス侯爵アンヘル・デ・サーベドラの悲劇『ドン・アルヴァーロ、または運命の力』を選んだ。ヴェルディは精力的に筆を進め、新作〈運命の力〉を携えてロシアへ向かう。ヒロイン役の歌手の降板でいったんは初演が延期されたものの、1862年11月の初演は大成功を収めた。しかし、ヴェルディは初演直後から作品を改訂する必要を感じていた。1869年、あまりに絶望的な結末が書き改められた改訂版〈運命の力〉がミラノで上演され、ここでも成功を収めることとなった。現行の序曲はこの改訂版のために作曲されたものである。

侯爵の娘レオノーラと騎士ドン・アルヴァーロは相思相愛の仲。ふたりが駆け落ちしようとする際に、ピストルの暴発から侯爵が命を落とす。ふたりは離れ離れに逃げるが、復讐心^{ふくしゅう}に燃えるレオノーラの兄の追跡により、過酷な運命にさらされる。序曲の冒頭で鳴り響く金管楽器の重厚な強奏が悲劇を予告する。木管楽器が奏でる第4幕の二重唱、弦楽器による「祈りの動機」などを経て、緊迫感みなぎる怒涛^{どとう}のフィナーレへと突き進む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1861年、1868～69年（改訂版）／初演（歌劇）：1862年11月10日、サンクトペテルブルク、マリンスキー劇場、改訂版初演（歌劇）：1869年2月27日、ミラノ・スカラ座／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チンバツ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、ハープ2、弦五部

ベルリオーズ
幻想交響曲 作品14

1827年、イギリスの劇団による「ハムレット」を観劇したエクトール・ベルリオーズ（1803～69）は、シェイクスピア作品の崇高さに胸を打たれるとともに、舞台女優のハリエット・スミッソンに熱い思いを燃えあがらせた。「彼女の演劇の才能がもたらす深い感銘は、シェイクスピアが与える衝撃にも匹敵する」。女優に理想化されたヒロイン像を見たベルリオーズは、熱心に彼女を追いかけて続けた。やがて充たされぬ思いが苦しみへと変わると、作曲家は苦悩を芸術へと昇華させるかのように自伝的作品〈幻想交響曲〉を書きあげた。副題は「ある芸術家の生涯のエピソード」。鋭敏な感受性と豊かな想像力にあふれた若き芸術家が、恋に絶望してアヘンで服毒自殺を図るものの死には至らず、奇怪な幻覚を見るといった筋立てを持つ。

同時期にベルリオーズを触発したのは、アブネック指揮パリ音楽院演奏協会によるベートーヴェンの交響曲演奏会である。「ベートーヴェンは、シェイクスピアが詩の新しい宇宙を見せたように、新たな音楽の世界を開いてくれた」。ベルリオーズの関心は、オペラやカンタータなどの声楽曲から、器楽曲の分野に向けて広げられることになった。失恋体験とベートーヴェン体験の両者がこの〈幻想交響曲〉に結実したといえるだろう。

第1楽章 “夢と情熱” 序奏に続く主部で、恋人を表す主題がフルートとヴァイオリンで奏でられる。この主題は形を変えて繰り返し登場する。**第2楽章 “舞踏会”** ハープが活躍する華やかなワルツ。芸術家は舞踏会に集う人々に恋人の姿を探す。**第3楽章 “野の情景”** イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが羊飼いの笛の二重奏を吹く。ティンパニが遠雷を表現する。**第4楽章 “断頭台への行進”** 恋人を殺して死刑を宣告された芸術家は断頭台にのぼる。**第5楽章 “ワルブルギスの夜の夢”** ^{まがまが} 禍々しい魔女の夜宴。醜い姿に変わり果てた恋人がやってくる。^{とむら} 吊いの鐘が鳴り、「怒りの日」の主題があらわれる。乱痴気騒ぎがくりひろげられ、壮絶なフィナーレを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1830年／初演：1830年12月5日、パリ／演奏時間：約49分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、ハープ2、バンダ（オーボエ、鐘）、弦五部

武満 徹
〈シグナルズ・フロム・ヘヴン〉

武満徹（1930～96）は、20世紀後半の日本を代表する国際的な作曲家。ストラヴィンスキーが絶賛した〈弦楽のためのレクイエム〉（1957）で一躍注目を浴びた。戦後の欧米の音楽の影響を受けながら創作活動を続け、日本の伝統楽器と現代音楽の語法を融合させた、琵琶と尺八、オーケストラのための〈ノヴェンバー・ステップス〉（1967）が海外で高く評価され、世界の音楽界から注目された。

〈シグナルズ・フロム・ヘヴン〉は、武満のなかでは数少ない金管楽器のための作品である。「2つのアンティフォナルなファンファーレ」の副題をもつ本作は、〈デイ・シグナル〉と〈ナイト・シグナル〉の2曲から成る。昼と夜を組み合わせているが、それらは対立や対比するのではなく、連続する関係にある。武満のプログラムノートによれば、「2曲とも、きわめて限られた音程関係とハーモニーによって作曲されている。そして、タイトルが暗示するように、平和で、幸福な感情に満ちている。親しい友人たちへの、挨拶としての、信号である」。ともに1987年に作曲され、〈デイ・シグナル〉は、鯉沼ミュージックの委嘱でジャズ・フェスティバルのために作曲され、〈ナイト・シグナル〉は、スコティッシュ・ナショナル・オーケストラの委嘱でマティアス・バーメルトの指揮で初演された。

それぞれ組み合わせが異なる2群の金管楽器が掛け合う。「デイ」（喜ばしく）は、ゆるやかな問いかけに、活発なモティーフが応える。やがて全楽器は一斉に奏され、「all bell in air!」の指示のもと、音楽は天に向かって力強く放たれる。「ナイト」（平和に）は、下行形のモティーフが2つの楽器群の間を行き来する。やがて「デイ」のモティーフも現れ、中間部ではソリスティックに楽器が絡み、最後は穏やかな響きのなかに溶け込む。どちらの曲もゆったりと、金管楽器の中を風が通り抜けていくかのように呼び交わされる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1987年／初演：【I. デイ・シグナル】1987年7月25日、東京 【II. ナイト・シグナル】1987年9月14日、グラスゴー／演奏時間：【I. デイ・シグナル】約3分 【II. ナイト・シグナル】約3分

楽器編成／【I. デイ・シグナル】〈1群〉トランペット3、トロンボーン3、〈2群〉ホルン2、ピッコロトランペット、トランペット、トロンボーン、チューバ 【II. ナイト・シグナル】〈1群〉ホルン2、ホルネット、トランペット、トロンボーン、チューバ、〈2群〉ホルン2、トランペット、トロンボーン2

モーツァルト

ディヴェルティメント 第5番 八長調 K.187 (Anh. C17.12)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～91) は、16歳でザルツブルクの宮廷音楽家となり、1781年に解雇されてウィーンに移住するまで、様々な職務をこなした。第一の職務は演奏で、なかでも大聖堂の典礼での演奏は最も重要な仕事だった。作曲家としても、大聖堂で執り行われるミサ曲などの宗教音楽をはじめ、宮廷音楽会のためや大司教の食卓で演奏する曲、祝典など宮廷での催しやザルツブルク大学の行事用の曲などの作曲も職務に入っていた。

ディヴェルティメントは、本来は「娯楽」や「気晴らし」といった意味をもつ言葉だが、モーツァルトの時代のウィーンでは必ずしも娯楽性の強い作品ばかりでなく、各パートひとりで演奏する器楽曲にもこの名称は用いられていたようだ。モーツァルトのディヴェルティメントは、演奏機会に応じて楽器編成や楽章構成は様々で、第5番は、フルート2本、トランペット5本、ティンパニによる編成。同じ編成の第6番八長調K.188と同様に、1773年頃に書かれたと推測されていた。しかし、モーツァルト作曲と伝えられていた第5番は、後の研究で、偽作であることが判明した。これは、当時流行していた、オペラの旋律を管楽器に編曲した作品で、ウィーンで人気が高かったヨーゼフ・シュタルツァー (1726～87) とクリストフ・ヴィリバルト・グルック (1714～87) の作品をもとに、モーツァルトの父レオポルト (1719～87) の手によって作られたものだった。

全体は10曲とされたが、第6曲と第8曲が欠落しており、8曲のみが伝えられている。前半5曲はシュタルツァーの作品、後半はグルックの「パリーデとエーレナ」からの編曲である。第1曲 アレグロ・モデラート、第2曲 メヌエツト、第3曲 アダージョ、第4曲 メヌエツト、第5曲 アレグロ、第7曲 アレグロ・モデラート、第9曲 アレグロ・モルト、第10曲 アレグロ・ノン・トロッポ。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：不明／初演：不明／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、トランペット5、ティンパニ

ドヴォルザーク

管楽セレナード 二短調 作品44

チェコ西部ボヘミア地方に生まれたアントニン・ドヴォルザーク (1841～1904) は、作曲家として世に認められるようになった1870年代に2曲のセレナードを作曲している。ひとつは、オーストリア政府から国家奨学金を授与された翌年に書かれた〈弦楽セレナード〉(1875)、もうひとつは、その3年後に作曲された〈管楽セレナード〉である。セレナードはもともと、夕べに男性が恋人の家の窓辺でギターなどを爪弾き歌う愛の歌を指した。モーツァルトの時代にオーストリアを中心とした地域で作られたセレナードは、貴族の祝日の行事や大学の修了式、婚礼の前夜祭など特定の慶事を祝うための多楽章構成の器楽曲となり、前後に楽士入退場の行進曲が置かれ、複数のメヌエツト楽章を含むものが多かった。

ドヴォルザークの〈管楽セレナード〉は、前年暮れにウィーン・フィルの演奏会で聴いたモーツァルトの木管楽器のためのセレナードに触発された作曲家が、1878年1月にわずか2週間で作曲した。木管を主体とした管楽器に低弦楽器が加わる編成で、モーツァルトの楽器編成や楽章構成を意識しながら、そこにはボヘミアの農村の素朴な情感や力強さも盛り込まれている。

第1楽章 モデラート・クワジ・マルチャ モーツァルトを手本に「行進曲」から始まる。引き締まったリズムの主部に対し、へ長調の中間部は明朗で温かい。

第2楽章 メヌエツト テンポ・ディ・メヌエツト メヌエツトとされるが、緩急の対比を特徴とするボヘミアの民俗舞曲「ソウセツカー」の形式をとる。味わい深い主部、トリオ (プレスト) は、軽快な民俗舞曲「フリアント」による。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート 美しい旋律が静かに広がる緩徐楽章。

第4楽章 フィナーレ アレグロ・モルト 陽気なポルカのリズムののって民謡風の旋律が軽快に歌わる。最後に第1楽章の「行進曲」をはさみ、華やかなコーダで結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1878年／初演：1878年11月17日、プラハ／演奏時間：約24分
楽器編成／オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン3、チェロ、コントラバス

シCHEDリン カルメン組曲 (ビゼーによる)

ジョルジュ・ビゼー (1838～75) の歌劇〈カルメン〉(1875年初演) は、いまなお高い人気を誇るオペラである。その音楽だけでもギロー編曲の管弦楽組曲 (第1組曲・第2組曲) をはじめ、様々な編曲版で親しまれている。ロシアの現代作曲家口ディオ・シCHEDリン (1932～) の〈カルメン組曲〉は、弦楽器、ティンパニ、4群の打楽器という異色の編成で、ビゼーの作品が大胆に編曲された。

シCHEDリンは、モスクワ音楽院で作曲をシャポーリンに師事し、卒業翌年の1960年にバレエ〈せむしの子馬〉が、61年にはオペラがボリショイ劇場で相次いで初演され、大成功を収めた。ソ連時代のプロコフィエフの作風を受け継ぎ、同世代のシュニトケやデニソフよりも保守的だが、すぐに若い世代の代表者とみなされた。セリー技法や不確定性、12音技法など20世紀の新しい作曲技法を用いることもあったが、常に慎重な態度を貫き、共産主義社会の枠から大きくはみ出ることにはなかった。ショスタコーヴィチの後を継いで、ロシア作曲家同盟議長を長年務め、自国の作曲界の中心的存在となった。夫人はバレリーナで、59年にソ連の芸術家の最高地位である人民芸術家に選ばれたマイヤ・プリセツカヤ (1925～2015)。強烈な個性と表現力で確固たる地位を築き、20世紀最高の踊り手と称賛された。

1966年、キューバの名振付師アルベルト・アロンソは、プリセツカヤを主役としたバレエ版〈カルメン〉の上演を企画した。編曲をショスタコーヴィチに頼むが、「ビゼーのたたりが怖い」と断られ、ハチャトゥリアンにも拒否され、シCHEDリンが担当することになった。ここでは〈カルメン〉(全4幕) 以外のビゼーの作品 (劇音楽〈アルルの女〉や歌劇〈美しいパースの娘〉) の旋律も用いられ、全編でリズムが際立つ、大胆で斬新な編曲版が作られた。

バレエ (全1幕) は、1967年4月20日にボリショイ劇場で初演された。批評には賛否両論があったが、ショスタコーヴィチが絶賛したことが追い風となって、世界各地で上演されるようになり、翌年、全13曲の演奏会用組曲が編まれた。

第1曲「序奏」 鐘の音が静かに「ハバネラ」のモチーフを響かせて始まる。最後の小節の強烈なクレッシェンドで、切れ目なく第2曲に入る。**第2曲「踊り」** 華や

かなアラゴネーズ (第4幕への前奏曲)。物哀しい旋律を第1ヴァイオリンが歌い、弦楽器のピッツィカートとウッド・ブロックのリズムが印象的である。**第3曲「第1間奏曲」** マリンバの主題は、第1幕でカルメンの登場を男たちが待ち望む場面の音楽。後半はカルメンの宿命を暗示する主題がヴィオラとチェロで奏される。**第4曲「衛兵の交代」** 「アルカラの竜騎兵」(第2幕) による行進曲が多彩な打楽器を用いることでユーモラスな表情の音楽に生まれ変わる。**第5曲「カルメンの登場とハバネラ」** カスタネットが効果的に用いられ、マリンバとヴィブラフォンの独奏も面白い。**第6曲「情景」** 第2幕の最後でホセが密輸団の仲間に入らざるを得ない場面、第1幕の女工員たちの休憩の場面とカルメンが取り調べを受ける場面の音楽がつけられている。**第7曲「第2間奏曲」** 「第3幕への前奏曲」。弦楽器のピッツィカートの伴奏にのって、ヴィオラが美しい旋律をしっとり歌い上げる。**第8曲「ボレロ」** ビゼーが〈アルルの女〉のために書いた軽快な「ファランドール」。**第9曲「闘牛士」** エスカミーリョが歌う有名な第2幕「闘牛士の歌」による。**第10曲「闘牛士とカルメン」** ビゼーの歌劇〈美しきパースの娘〉から転用されたジブシーの踊り。寂しげな表情の音楽が弱音で奏される。**第11曲「アダージョ」** カルメンの死を暗示する「第1幕への前奏曲」の力強い主題から第2幕のホセが歌う「花の歌」へ。二人の運命が暗示される。**第12曲「占い」** 第3幕のカルタ占いの場面。カルメンの占いは、何度やっても「死」が告げられる。音楽は劇的に盛り上がるが、死の影がひたひたと近づいてくる。**第13曲「終曲」** 第4幕の賑やかな音楽や最後の場面、第2幕の幕切れの音楽などが巧みにつなぎ合わされ、最後に第1曲「序奏」の鐘の音が静かに回想されて結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1967年 (バレエ)、1968年 (組曲版) / 初演：1967年4月20日、モスクワ / 演奏時間：約44分
楽器編成 / ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、トムトム、ボンゴ、テナードラム、サスペンデッド・シンバル、ハイハット・シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、マリンバ、マラカス、鞭、クラベス、カスタネット、ウッドブロック、木魚、ギロ、銅鑼、クロテイル、チャイム、カウベル、カバサ)、弦五部

ヤナーチェク

バラード〈ヴァイオリン弾きの子供〉

レオシュ・ヤナーチェク（1854～1928）は1880年、ギムナジウムの教師としてブルノに赴任した。その学校には民謡の収集活動で有名な教師バルトシュがいた。ヤナーチェクは同僚に収集の手伝いを申し出る。はじめは集めた素材を管弦楽用に編曲する程度だった。そうしているうちに本格的に作曲家として立つ決心を固める。こうしたスタートラインが、ヤナーチェクをチェコ音楽の独自性の追求に向かわせた。それは音楽面（民俗音楽）、文学面（チェコの神話や文学）はもちろん、社会・思想面（国民国家としてのチェコへの共感）にまで及んでいる。

1912年の〈ヴァイオリン弾きの子供〉にもその三面が色濃く映る。この作品は、スヴァトブルク・チェフの詩に基づく管弦楽曲だ。詩の内容は次の通り。

寒村に住むヴァイオリン弾きが死んだ。遺されたのは1挺のヴァイオリンとゆりかごに眠る赤ん坊。村の老婆が幼子の世話を言いつかる。ある夜、老婆は不思議な幻影を視る。死んだヴァイオリン弾きが赤ん坊の枕^{まくら}辺^べに立ち、楽器を奏でて我が子をあやしては、天の国には飢えも死もないと語りかけ、赤ん坊をあちらの世界に誘うように口づけをする。その瞬間、老婆は十字を切り、ヴァイオリン弾きを追い払う。やがて老婆も眠りに落ちる。翌朝、村の顔役が家を訪れると、あるはずの楽器は消え、ゆりかごの赤ん坊は息絶えている。

こうした筋書きを作曲家は、分かりやすい筆致で3部分からなる交響詩に仕立てた。とはいえこの曲は、単に説話詩を音楽化したものではなく、被支配、貧困、病、死といった人間社会のひずみを鋭く表出した作品である。

死んだ父親を独奏ヴァイオリン、病気の赤ん坊をオーボエ、貧しい村人をヴィオラ、顔役をチェロとコントラバスが描き出していく。さらに、トロンボーンやバス・クラリネットといった低音管楽器が、顔役の過酷な支配とそれに慄^{おそ}く村人の恐怖感とを表現する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1912年／初演：1917年11月14日、プラハ／演奏時間：約12分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール）、ハープ、弦五部

リゲティ
ピアノ協奏曲

ルーマニアでハンガリー人の家系に生まれたジェルジュ・リゲティ（1923～2006）は、1956年にブダペストからウィーンに移り、シュトックハウゼンやアイメルトラ資本主義国の作曲家と交流を持つようになったことで、その注目度を高めていった。そんな中、故国にいたころから温めていた計画に再び着手する。その取り組みは最終的に管弦楽曲〈アパリシオン〉（1958～59年）として結実する。

この作品は1960年、国際現代音楽協会（ISCM）音楽祭で紹介されるや、瞬く間に世界中に広まり、賞賛の声を集めた。さらにリゲティは、翌61年に書いた管弦楽曲〈アトモスフェール〉により、その名声を確固たるものとする。

この〈アパリシオン〉や〈アトモスフェール〉からこのかた、作曲家は「基本的な問題を解決するための新しい方法を模索し続けてきた」という。「私たちは（曲の中で）特定のリズムが続くとそれを追うのをすぐにやめてしまい、時間とともに進行しているはずのことがらを、静止しているものとして見る」。このように「個々の構造（特定のリズム）が、より包括的な構造（ひとかたまりとなって静止する状態）へと広がっていく」。「これが私の基本的な作曲コンセプトだ」とリゲティは語る。1950年代末から続くこの問題に対する答えがピアノ協奏曲である。

作曲家は1985年から86年にかけて最初の3楽章を脱稿し、グラーツでこれを初演、続いてウィーンで再演した。この2度の演奏を聴き、リゲティは第3楽章がフィナーレにふさわしくないと判断。87年に第4、5楽章を加え、翌88年1月までに浄書譜を完成させた。

第1楽章 冒頭から3拍子系と2拍子系の同時進行が続く。両者が並行すると当然、リズムはばらける。さらに、それぞれの拍子の楽句を、タイミングが一致せぬようにグループ化（不規則に分節）していくので、両者のリズムはつねに複雑に絡み合ったまま進む。

ハーモニーは平行音程に基づく。和声上の力動という点からすると決して動的ではない。ただし手触りは刻々と変化する。異なる拍節の共存により恒常的に食い違うリズム、平行音程を旨とした声部進行はいずれも、中世の西洋音楽を思わせる手法で興味深い。

第2楽章 第1楽章から休みなく続く。オクターヴを半音半音全音半音半音全音……と分割して生じる9つの音からなる旋法を用いる。これを移高して、そのときのハーモニーを決める。音響面では極端な音域の並行が耳を引く。ピッコロの超低音とファゴットの超高音が同じ音域で重なり合う。一方、ピアノは超高音域と超低音域とに乖離する。

2系統の3拍子を共存させるので、2拍子系と3拍子系を一緒にする第1楽章よりも、見かけ上は単純になるはずだが、実際は規則的でないアーティキュレーションによって、声部間のリズムの^より目は複雑になる。

第3楽章 オクターヴ内の12の音を2系統の全音音階（6音音階）に分けて同居させる。すると、12の音を用いるコンテンポラリーの西洋音楽でありながら、そこには2つの旋法が響いているかのような錯覚が生じる。大中小の2・6・8拍子が同時に進むので、リズムは著しく錯綜する。

第4楽章 冒頭、点描的に開始して、3拍子系と2拍子系のギャップにベールをかけている。徐々に音楽が煮詰まり参加声部が増えてくるにしたがって、両系統のリズム上の食い違いがはっきりとする。音楽素材は繰り返されるが、そのたびに少し姿が違う。この螺旋階段状の変化のおかげで、作曲家が「つねに新しく、しかし同じである」とする音楽が生まれる。

第5楽章 オクターヴ内の12の音を白鍵の7音と黒鍵の5音とに分けることで、第3楽章と同様の効果を狙う。3拍子系と2拍子系のリズムのずれにギスギシしたところはなく、どこか朗らかな雰囲気が漂う。リゲティはこの作品で、拍節の並行使用と音階システムの応用とによって、リズムの裂け目に旋法的なハーモニーを生じさせることに成功した。この楽章はその点で最大の密度を誇る。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1985～88年／初演：1986年10月23日、グラーツ（第1～3楽章）、1988年2月29日、ウィーン（全曲）／演奏時間：約24分

楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ、クラリネット（オカリナ持替）、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、打楽器（大太鼓、小太鼓、トムトム、ロートトム、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タムプリン、グロッケンシュピール、シロフォン、ホイッスル、ポリスホイッスル、スライドホイッスル、クロマチック・ハーモニカ、鞭、フレクサトーン、ウッドブロック、木魚、ギロ、クロティル、カスターネット）、弦五部、独奏ピアノ

ヤナーチェク
序曲〈嫉妬〉

ヤナーチェクはオペラ作家を自任していたが、国際的には当初、室内楽や管弦楽など器楽作品の書き手として評価された。その自己認識も他者評価も、いずれも的を外してはいない。というのも、言葉の持つエネルギーを器楽の中に溶かし込む点に、この作曲家の身上があるからだ。〈ヴァイオリン弾きの子供〉しかり、この〈嫉妬〉しかりである。

この序曲はそのジャンル名の通り、当初、オペラの幕開けを告げる曲として構想された。それはヤナーチェクにとって3作目となる歌劇〈彼女の養女（イエヌーファ）〉である。作曲家はこの作品の前奏曲として1894年3月に〈嫉妬〉に着手し、同年12月にピアノ連弾の形で脱稿した。それを翌年2月までに管弦楽化しパート譜を作成したものの、リハーサルでその楽譜を放棄。1904年1月21日のオペラの初演には序曲をかけなかった。

この〈嫉妬〉と〈イエヌーファ〉が共有するのは音楽のモチーフではなく、人間の情緒である。この情緒は登場人物のひとりラツアのいらだちや憧れと言ってよい。ラツアはイエヌーファに懸想するが、当のイエヌーファが思いを寄せるのはラツアの異父弟シュテヴァだ。彼女はその異父弟の子を身籠っている。ラツアはそれに深く嫉妬する。

ヤナーチェクは序曲に民謡を引用しているが、ピアノ連弾の楽譜にはその引用元の詞章を併せて書き留めている。作曲家は言葉からもインスピレーションを得て音楽を生み出し、その断片を発展させた上で、元となった言葉を手放すという手順で作曲した。

序曲はティンパニの5連打で始まる。その短いモットーを厳しい楽想で印象付けたのち、憧れを示すような部分に入るが、バス声部には怒りの念が残る。改めてティンパニの5連打を呼び水に、忙しなさやのびやかさなどさまざまな情緒のなかで、5連打から徐々に悪意が抜けていく。冒頭が短調で回想されるが、すぐに長調に移旋し5連打で力強く曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1894～95年／初演：1906年11月6日、プラハ／演奏時間：約6分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール）、ハープ、弦五部

ルトスワフスキ
管弦楽のための協奏曲

第二次世界大戦後、ポーランドはソヴィエト連邦の影響下に置かれた。1950年にドイツ民主共和国（東ドイツ）と国境を画定し、52年に人民共和国として主権を回復してからも、実質的にはソ連の衛星国だった。

1953年、ソ連の最高指導者スターリンが死んだことで、ポーランド国内ではアートの各分野に西側の前衛芸術を取り入れる機運が高まった。音楽界も御多分に漏れず最先端の様式に目を配るようになる。その結果、同国では「ポーランド楽派」と呼ばれる作曲家の一群が注目を集めるようになった。ペンデレツキ、シェツェル、グレツキらがそこに名を連ねる。その筆頭ともいべき人物が、ヴィトルト・ルトスワフスキ（1913～94）である。

ルトスワフスキはワルシャワに生まれ、戦間期に同地で音楽を学んだ。戦後の困難な時期にピアニストや劇伴作曲家として糊口をしのいだ^{こころ}が、1950年に転機が訪れる。ワルシャワ・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督ヴィトルト・ロヴィツキが、同楽団の戦後の復興を祝い、その実力を内外に示す楽曲を提供するよう、ルトスワフスキに持ちかけた。作曲家はそれから4年かけて、注文にふさわしい作品を書き上げる。それが〈管弦楽のための協奏曲〉だ。

ルトスワフスキは創作の初期から、拡張したハーモニーをその基礎においてきた。それは、民俗音楽に基づく全音階的旋法（民謡調の音階）と、長短調の和声システムから解き放たれた和音の連結とを半ば衝突させて、そこから新たな秩序を引き出していく手法だ。管弦楽のための協奏曲もその路線にある。

ルトスワフスキはこの作品にポーランド民謡をちりばめてはいるが、それはあくまで興をそそる素材として。注目すべき音楽上の成果は、そこから生成した主題、その主題に基づくポリフォニー書法、そのポリフォニーに説得力を持たせる管弦楽の精緻な操作のほうにある。セザンヌの連作絵画『サント＝ヴィクトワール山』の主眼が、もはや風景画としての美しさではなく、量感と色彩による画面の構築にあったことと事情は同じだ。セザンヌが以後、キュビズムやフォービズムに影響を与えたように、ルトスワフスキもまた、ポーランド楽派の後輩たちにとって大きな礎石となった。

第1楽章 ブラームスの交響曲第1番を思わせる冒頭。マゾフシェ地方の民謡を引用して主題とする。これをチェロから順に弦楽で受け渡していき、それをポリフォニックに膨らませていく。やがてそこに管楽器が合流し、音域は拡がり音色も多彩になる。性格の異なるエピソードを経て、長い保続音の上で管楽器群が組み合わせを替えながら主題を繰り返す。その手触りの変化に、作曲家の管弦楽法の粋を聴くことができる。

第2楽章 スケルトツォにあたる楽章。冒頭から無窮動^{むきゅうどう}が続く。ホケトゥス（各パートが交互に音の断片を弾くことで、全体としては一連の旋律を作り出すこと）によって、さまざまなパートから代わる代わる音を引き出し、聴き手の耳でひとつの流れとして音楽を合成させる。そこに金管が楔^{くさび}を打ち込むところからが中間部。その後、無窮動の楽想が戻る。

第3楽章 民謡を引用した低音主題に基づくパッサカリア（変奏曲）に、トッカータとコラールが続く。パッサカリアでは、低音主題を18回繰り返すあいだ、楽器の組み合わせを変化させながら、最低音域から最高音域へ、また静かな楽想から分厚い音響へと音楽は移り変わっていく。アイデアとしてはラヴェルの〈ボレロ〉によく似ている。

パッサカリアの主題がかすかに余韻を残す中、力強いトッカータが始まる。切迫度がいくぶん収まると、柔らかな楽想に移る。ここからがコラール。木管に金管と弦楽が合流し、徐々にサウンドに厚みを持たせる。コラール旋律は新作だが、対旋律は民謡に基づく。やがて切迫感が戻り、徐々にその度合いが高まっていく。

これまでに現れたさまざまな管弦楽書法、たとえばホケトゥスであったり対位法であったり楽器の組み合わせによるサウンド操作であったりを総動員して、作品を締めくくる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1950～54年／初演：1954年11月26日、ワルシャワ／演奏時間：約28分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット4、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、中太鼓、トムトム、フィールドドラム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフォン、銅鑼）、ハープ2、チェレスタ、ピアノ、弦五部